

自己点検・評価報告書

日本語教育機関名：与野学院日本語学校

点検・評価実施日：2024/4/10

実施責任者：校長 谷 一郎

実施担当者名(役職)：教務主任 大知里 弘美、事務長代行 花田 涼

<総論>

コロナ期と違って新入生もほぼ予定の時期に入国し、授業そのものも平時の流れで行えるようになった。しかし、入学希望者数が増加する一方、コロナ期に離職した教員の補充が思うようにいかず、年度後半は、ぎりぎりの教員数で授業を行う状態が続いた。また、コロナ後の進学者の激増により、受験に苦勞する学生も多かったが、最終的には、ほぼ希望の進路に進むことができた。今年度からの試みとして、就職希望者への積極的な支援も行い、こちらも一定の成果を得た。さらには、就活のための在留資格特定活動の取得にも便宜がはかれる体制が構築できた。年度後半は、業務の効率化を進め、一部ではあるが、業務フローの改善やオフィス環境の改善が実施できた。また、日本語教育機関認定法の成立に伴う認定日本語教育機関の認定申請の準備のため、教育課程の見直しを進めている。

<教育の理念・目標>

理念は、教員会議、校内での掲示を通じて、十分に周知されている。一方、認定日本語教育機関の認定申請の準備の過程において、理念と目標や課程の整合性を見直しを進めている。

<学校運営>

中期の運営計画に基づいた運営で1年間が過ぎた。目指す方向に対しては、一定の成果が見えつつあるなか、運営計画の修正も行った。コロナにより教員、学生ともに出席率に関する意識の変化、混乱が見られたことから、出席管理方法についても改めて定めた。年度予算の編成と執行ルールの明確化は長年の課題であったが、認定日本語教育機関の認定申請に向けて、日本語教育とその他の事業(学生寮経営や人材紹介事業など)を分離した決算及び予算の策定の準備を進めている。

<教育活動の計画、実施>

教育活動の計画、実施面においては、規程通り安定して実施されている。

<成績判定と授業評価>

成績判定、進級や卒業認定は、適切に行われている。授業評価に関しては、学生による教員別教員評価の実施により純粋な授業評価の在り方について見直す必要性が出てきており、認定日本語教育機関の認定申請に向けた改定作業を進めている。

<教育活動を担う教職員>

教員については、年度途中から新しい評価制度を導入し、それらを以前よりは、待遇にも反映させるように変更した。職員の評価制度についても変更の準備を進めている。また、学生による教員評価を以前より充実させ、教員の自己研鑽に生かせるようにした。また、教職員の研修は継続されており、また、対面での外部研修も復活してきたことから、積極的に参加させている。

<教育成果>

教育成果の判定は、適切に行われており、進路の把握も漏れなく行われている。しかし、卒業生の状況把握の仕組み作りについては、引き続き適切な在り方について模索していく。

<生徒支援>

適応、生活、進路、在留等の支援は、概ね十分にできている。

<進路に関する支援>

進路指導は、体系的に行われている。就職希望者が増加していることから、就職支援のためのオンラインプログラムを開発し、希望者に受講してもらう体制となった。また、修了後も就活を継続する学生のために、就活のための特定活動取得のためのルールを定めた。

<入国・在留に関する指導及び支援>

入国・在留に関する指導は、丁寧に定期的に行われている。昨年度に引き続き、社会問題となっている資格外活動の時間オーバーについて、オリエンテーションで再三、アルバイト関連の指導を行った。Google spread sheetによる管理、学生の通帳チェックも行い、資格外活動の違反防止に取り組んでいるが、在留期間更新において一部の学生の資格外活動違反が判明し、帰国指導を行った。

<教育環境>

教育環境については、概ね問題はない。

<入学者の募集と選考>

学生募集、選考は、概ね問題なく行われている。コロナ禍による応募者減から数の面では回復しているが、質の確保が課題となっている。

<財務>

財務状況については、とりたてて問題はない。

<法令遵守>

コンプライアンスに関しては、昨年度同様に推進体制に基づき行われている。

<地域貢献・社会貢献>

コロナ禍によって途絶えた地域交流は再開したが、コロナでの断絶により、交流意識の衰退が

見られ、新たな交流の伝統づくりが課題である。